



知久良物語

全

9
1887



門口仁
番 1387
卷

くら物語



くら物語 後註和註相雜りて何れもかたつく所なきあり

28 二十夜

正徳初の身合神無月さ替自わらあやまる所の大意を奉
て童子にかたれり執一生の過さかへり見るに若き向は
色にあり壯を過ては若にあり信た知るにわかれ方にほ
こりて己を是とある器はたほかる人の不幸何れか是よ
り大なるへきよりて又幸の極をいへばをのれを虚にす
て人を受過を改め善に還せ身に疵なきに過たるはなす

白石戯著
知久良物語

全

禁火原為宗
目録

くら物語



漢語和語相雜りて何れもかたつく所なき也
くらとは名付たるなり



正徳初の年冬神無月、**瞽**自からあやまる**所**の大意を擧
て、**童子**にかたれり、**熟**一生の過をかへり見るに、若き向は
色にあり、**壯**を過ては、**名**にあり、**た**知るに、**い**かれ、**才**にほ
こりて、**己**を是とむる、**罪**は、**た**ほかる人の不幸、**何**れか、**是**よ
り大なるへきよりて、**又**幸の極をいへば、**を**の、**い**を、**虚**に
て、**人**に受過を改め、**善**に遷て、**身**に疵なきに過たるはなし
富且貴ふして、**余**あかきを、**幸**とむなるは、**さ**る事なし、**い**さ
には、**あ**らず、**幸**唯人にこそ、**あ**れ、**天**か下の、**賢**皆、**竟**、**解**にあつ
まりて、**皆**、**樂**、**紂**を、**去**たり、**盜**、**距**、**か**いの、**ち**、**永**、**ま**も、**身**の、**あ**、**じ**、**わ**

いとなをにたるのみされば徳は永く福をたもちて福は
かへりて徳を矢へり然共人皆三の物をたもんで一の
徳をかろんせり是を知とせんかいつづくとれば我猶暗
くて自やみぬ人とあらざりし身の心さへ明を矢して余
なかきは耻をつむてふうらみあり早く死をるがまさる
あるべし志かのみあらざり道に志たか小幸な一林むか
難波にありしと賢君の召に應じて江府にきたり善言聞
て始て木をれをあせしに明年の冬君身まかり~~給~~りぬ志
かりより德音絶へてた~~い~~衆人のあなとりを得つるか
も其事實にはあらむ耳にさかじ心になやみ侍りつれ
是も未だ地山の石を磐くたをけたりしに草野に退し
後は~~毀~~りの言葉いたる事もなくて恐る~~る~~憚る~~る~~所なり孔子



曰三人行へは必我師有りとなん孟子も又求むれば餘の
師あり人只不末のみといひ且不慮にして知るものは良
知なりといはれたり然れども爰にあつては民のいやし
守道を見れば~~猶~~橋にとま~~り~~言をきけば利害にいひを戒
あつてとるべきな~~し~~小人あるかな女は殊にあつ、かな
れと柔にして順心愚にして直き~~者~~を見つあ~~し~~ま習にも
れもやあらん古の意にいひ、偽ありといへりさること
むか~~し~~士の方は衆よりも猶さか~~し~~くて都はいと~~い~~住~~う~~
かりける人をとるに身を以てし身を修るに道を以てを
ところといつろにわれには総て道のなまゆへ~~毀~~譽に欺
かれ好悪に私ありて思ふ所~~聞~~所皆さか~~し~~まになりたり
さるからに誠は志らす志ることは誠ならて日々に自ら

暗に入ぬ^{また}末の乱は本にたより遠き憂は近きにある
 といひつれどこゝに眼の間ふなり^{また}利と善との間は
 舜と路とのわかる、所なりと云へり實に天下吉凶其瑞
 既にありありあるべし慎むべし捨て取舍捨べき物は是
 より先なるはなし然るに我性利は剛て随ひ安く善は恐
 ルて近きかたしよりたもへり良知といふもの我にふ
 しかあはれとも力のたらざるか知てあやまる事を多かる
 然れば凡の事あること有て疑なりといふとも自から申
 るし是と云へけんや我ことに文義を見るにあやまり
 あり所謂たもんばからむして志る物とはあはれ物に
 いわらふ童部も其親を愛する事を志らざるなく其長
 るに及では其兄を敬むる事を志らざるなり是を良知と

いて人の性も善ある事あるのみ然は心道に通
 して後良知の全骸あらはるべきに私知に任して是非を
 正せり危かなよりて^{また}志を考ふるに子貢富に居の
 同の宰我喪を短ふるの論是皆我知にたしみてみつ
 から得たりと云なり夫乃佛老か虚無寂滅揚墨か為我兼
 愛の如きも又谷見所是として敢て疑ふ心なり其類い
 を良知といはば孟子に笑われ侍りなん堯舜は大知に
 て知を用^給はず同事を好て衆にはかりをのれを捨て人
 に従ひ給ひたり孔子曰終日不食終夜不寢以思無益不如
 學也又曰我非生而知者也信而好古敏而求之者也志か
 れは同て善を求め信して古を好むは至聖至神の學に
 て天下の道復にもる、はあらざりけらしは尊きも

賤しきも学いさらむは止なんの学ふとならばかくてを
徳はなるべかりける然るに馨か不幸なる賢師良友なふ
して交る所のしめは皆下等の人間所の語は下等の語の
み所謂四面牆壁の内に居して明を得るか如く成け
るいかしてまいせめてをのれをあらんとならはあり
し辞を文字にとりめて不方をあらはし侍なんか見るへ
きもの是のみありさるからに我歌讀道は志らさりさり
しかと時に愚たかき事に觸て思ひ出る言の葉を綴りつ
らねてなん心のかたちを繪書出せり賤い哉知のつたな
き性のいがみたるさなかりをれと見ある物かり深く耻
痛く憂いて眉を志あめ襟中に汗正るわがたほかるま
かはあれと口を利し言を巧にむる類いにはあらむ本の

姿の汚れたるなりされは我性うまれ儘の姿なりせば
いやしかるともかくはなからんにた、習ふ所に汚され
てまをく遠くふりけりし汝が如きは幸あり年のまた
にたり満さるに才違ふして学弘く今よりして道を身に
をろ心あらは徳のなることはかるへからず押る所を慎
しめや童子同り翁の性狎る所つれにありてけかれを
まろや日吾年十六の冬法花を讀て譬喩に迷い十七の春
只二句を得てまよひよときたり佛十方佛土と宣いつれ
地獄ありべき所なり又三界無安としかれたれば極樂の
つくに有て所をなしなん善身につむものにはたのしみ
たほく身に積ものにはとるしみ多し善心はいろく衆
生を愛し悪心は善く衆生を害せり衆生を愛する者は尊

佛。衆生を害する者は是鬼佛土三界只一心にあり釈迦既
に心外無別法としかれたりかくなん見れば譬喩方便の惑
はさりぬされとも我心さへへと、あるものありて本の
道には帰らざりけりハハいかんとすれば法師は言を
造りて世を欺き民は皆教を信して深くまよへるさるが
中に我ひとり聞て苦しみ思ふて病はたにくみ歸しむ情
有てともすれは言て嘲ることもあるあれまかあれは先
には迷ふて自らをち後には知て自らたかふ也まよふて
落水は罪かろし知てをこるは罪たもし禪此先法花に馴
て自からけを得たる也年ホにして禪禪をまなべり中にも
一休和尚は悟り得て法をばふれみつからみかきて玉を
ちし高きを究めて類いを出たり我其二三をよかくなむ

歌に曰

釈迦といふいたつら者の在に出て多くの人をまよ
わするかな
方便説をち破りたり
偽をいいて地獄に落るならふ事つくろ釈迦いか
いせん
一字不説の意を得たり
佛にもなりかたまりて何かせん石佛等を見るにつ
けても
妄想も除かむ真をも求めむ更に住むる所なふして世縁
に従ふのみ此國の一人たりはた瞽々病をいへは意を刻
みて事を謀り知を鑿して深きを求め侍りに一休の水鑑

を得て群にみれば替か病こくく是に移りて形をなせ
り是やさきに知て驕て動いて止さる汚れなるべし夫水
の清る物知いたれば影を物し物去は影と、め在不動不
流常常にして更にあつかる所あり一休の心かくてやか
くはか、れたるらんを尊み侍りたり彼大慧かい
けん生相なく滅相なきの形ナ則氏鑑に顯はれて我本来
の面目を見つ志かありより意を厭ひ知をにくんて生滅
なき事を欲せしに久ふして後顧れば心また所をかへて
動きたり意は抑ふる事あふして乱れ知は守る事あふ
て忘也是といにへにかんかへるに黄蘗は母に禮あり
南泉は猶に慈あり是皆意に則なふして乱れたる也戴安
道は其心住むる所ありといはんか雪世方にみち月船中

を照して昼にまされる山河の夕へ興に乗じて来り興つ
きて帰るといひは禪法の意を得たり然れども去来道
による事なふしてほしいまあり此三人は一家の達人
たり生滅なきの工夫則なく守りあふして爰にいたる
たもぬに君に仕へて民を治るの人守りあふして官にを
り意に随いて事をとりなば善惡討れ刑禁ゆるみて國危
かりなん然れば佛の寂滅は政事にあつて所あり
もやせんと思ふ折ふ都の大儒輩のまよふをみて深く
あはれみ年をとりて大踏案内せられたり其折を導や
敬を志めて乱れたるを現を説て知をいらま仁をさと
して内を厚くして善を修りて外を方に一動静礼に志た
かつて性其初にかへらん事を求めめたり嗚呼教好あ

ありぬ道は近きにあり事は安きにありあさは成へき物
なるに誓が質極て浮躁にして志ばらくし教に處事また
わがり~~必~~は礼に立義に行力~~カ~~はたえなかりきまかれ
いしんは常にかへりたりよりて彼美玉を見ればたしい
かなかけてむな~~一~~き所あり

あら樂や人が人共おもは洋は人をも人と思あがり
けり

此心みつから得たる所に居あれる~~か~~らむは少く怒みた
る~~か~~はた唯牝獨尊といひ~~一~~辭に習へるか竟義は大知に
して知あきか如~~一~~孔子は至聖にして~~聖~~にたら~~ず~~かくして
なん疵あき玉といふべかりけり独雲門和尚佛の疵を見
る事ありて~~一~~一棒に打殺して狗子に與へて喫せん

めんと笑へり~~一~~傲を~~悪~~人て則傲ルりはた~~れ~~の~~け~~る~~癖~~
のけ~~一~~きは人の迷を解に似て人の無禮をたこ~~ま~~にたれ
り師をあなとるの道是よりいらけて疵また疵ま~~く~~はへ
たり~~一~~固公いま~~る~~かりせば罪をゆるさ~~一~~一休は雲門
に似たるが徒者といひ~~一~~辭と又過たり然れ共其清き玉
いへは疵はあれとも美玉にして~~一~~今~~く~~汚れ~~て~~る~~る~~かり~~一~~
帝儒の及ぶ所にあらよりてみつから~~一~~愚をあらは~~し~~
なん

かありみて人か~~と~~へはあ~~か~~ある~~一~~耻てあたふる~~事~~
言葉した~~一~~
我はまた人をと~~か~~むるいま~~る~~なき心のさかをはら
いかねつ

かはかりの志たも四十に及て端を及ける我若かりよ
り書よよむるを好み一か其才我身の悪は知ことあり
ていたをり人の非をのみにくみ^ん志^んは^んりは何といふ事
をたよる^物には目利の有て其道を得たる一人是を究む
はたよく人を志るものは聖人たり人は物よりはなた
事ありするあいた^聖とい^ひと^道いま^ま在^る事^のあり
てか巧言令色の孔を恐^れん^んい^てな^ん人^を一^るは^聖な
り^とを^仰ける然^んは^聖た^も恐^れん^んて^かた^人一^まり^ける
にいかなる^んの^聲か^聖人^を志^る事^やあ^らず^悔所^なかる
らん^ん志^へなり^愚は^みつ^かり^愚たる^事を^志ら^ず故^に其^心
驕^てた^これ^りと^せず^聖は^みた^かり^聖たる^事を^志ら^ず故^に
に其^心謙^一と^謙せ^りと^せた^この^相隔^るや^星と^石との

如く成けるはた其得失をいへは謙は天下の善を来し驕
は天下の善を退く此故に愚は来し愚にして聖は来し
く聖たり古人学て自らたらざるを^知るとい^いは^聖の
道也^聖端^は志^から^ず我^のか^し禪^を学^て心^の本^然に^如未
の^志か^たある^を見^得たり^時に^及て^師たる^もの^は則^ちある
して^悟れ^{とい}い^我も^みつ^かり^得たり^とた^もへ^り志^から^ず
一^{より}身^は簡^に居^て無^為を^是と^し心^は空^に任^して^実務
を^失せ^りる^小道^は人^に有^ても^{また}天^{たり}と^物を^残す
在^行て^留る^所あり^故に^至極^の文^王道^に望^て不^及か^如く
覺^しけ^ると^也然^るに^禪は^自ら^限れ^り既^に大^悟せ^し後^は
学^をた^らぬ^と云^て又^心を用^いて^志同^悟れ^りと^知る^事あ
れ^は則^ち悟^る所^の一^物胸^胸に^とまり^て人^と我^{との}隔^を

たせり我此頃易の良の卦を見るに朱程の説たな一から
程子は無欲の地を止る所といし朱子は至善の地を
、まる所といへり無欲の地は禪又其半を得たり至善
の地はかれ嘗て知る事な一程の仁舜の孝の如きは至善
たり然れ共猶自らたれりといへり給はて竟は民の艱苦を苟
竟にとひ辭は身をくらみ父母を慕ひて昊天に踰返せり
他は至善に止るとは心爰に至てやまさるをいへりとい
一毫いたれりとする心あれば則ちやめぬやめは則ちつ
りといへり、まるにあらむは良の卦其象を見れば山なり
と、まりて遷らむ是を身にとりて見ればせなかなり止
て動かむ又是を道に見れば至中至善其象にして心の
、まる所なりとて易の象義を取事至て廣く是變化の

道か又めとを取て其きわまりなきを見つよりて竊に象
の意とてか、いてなん

いとつ道をかたをかへて限なき物と事との中にか
くはつ

天地の變化二つに生じて四つにわかれ八つかさありて
なんやまむつきを蕩去常なり此現人にありても又然り
天地のとをくへた、る中たにも心はいとつわかれ
かりけり

物各また此心をなふ

心いとつ道にいとまりなは身を急むて人を
見さらん

此心我あり我ありて後二つとなり三つとなりたり

生業たり此間に仁あり義ありて清一といふべし如尚の
如きは悉く人事を捨て身をいらかしたり知達者の後世
を吊い現世を祈りて寺を富むむばかりことこそあけれ
是も又けかれたる也稱いたくいとふ所のことあざと士
と民とにせさせてはた其汚を乞て飢をいやせり荒はて
、雨はもる共寺に任らんほあろいさけて風は入共衣を
着らん寺と衣は民の力に出る物也志かあるは艱難勤
苦を人に譲りて稱獨や古きに居といふべきもの、又か
の一棒一喝は偏に虚心の光をはなつのみなり天行所の
四時の道ニル物物の性にして人其金を得たり故に感
ては愛慕宜別の情たこり通しては孝弟忠臣の則とある
り然るを禪は外典といひ人倫を總刺へ天地を **幻夢**と見

てわが大本を空一あせり是を知ルりといわんや先に汝
かとなへつる一休の歌 **善**く人を感せしめて民皆空裏に
あるいなは **職**分家業をなんか此弊由て来事久し佛は
もと **摩訶陀**王の太子たりしに位をさり國をのがれて乞
食せられたり其心清しといへとも倚る所あるはなるべ
しと然ル共又見つべき物あり山に入て十二年軍に出で
五十年心の存をる **所**身の行ふ所變せを哀ふ一日の
如し **吳美湏**達を初として國中の富人等辱く尊み侍し間
飲食の備は求まなく共餘りあらんにさはなくて朝くな
鉢をいらき給りしは無私無欲の至りにして人情の勉て
及ふ所にあらざる **嗟**聖人たり仁人たり其心捨身を事とし
無常を觀るる **弊**あるのみ傳へ周中國の醒は其心知に

て流るるを固ふして倚らず其徳圖にして南なく厚ふ一礫
かを故に富貴を厭むを貪財を憂へて只身の居る所に
て光正なり是を琢磨をまたて曇なく疵なき玉といふ
へかりける中にも舞は極て舞一子眠の子なり文頑に母
いをかりく象騁ルり舞是をたさむるに孝を以て一善至
らざる所なりといへども其惡猶やまをて一惡に善
せんと謀り一こともあまたたびなり是いかなる事は贅
暇後の妻に溺ルて妻も又我子に迷い一申へに有ける
危はあり一かと舞の心に怨なり一常に身を責てなんかく
の如きはたらざる所我にあるべ一罪何れにありやと求
めかな一み玉いてけり去程に見る者が深く感一聞者は
大に驚き一く人口に及い一かは玄徳一り聞へて帝堯の

御心にかなふ事あり故に二女を降して妻と一奉て百揆
にたら一め余して四門に宿たら一め三載試て後帝位を
譲らせ玉いたり爰に於て先づ帝堯の御徳を見るべ一富
貴を悦び我子と愛するは天下の心たり佞人を親一み賢
人を疎むは古今の情たり貴き事天子より重きはな一富
四海より大なるはな一御子九人たわ一ま一ける然にか
くなん舞に譲らせ玉ふは是いかなる心を御徳の高き天
といと一くしてその光り日と共に四海を照らさせ玉いた
り實にかたく守りかた一舞にあらむんはあたわ一鳴
呼人を知るの智民を愛するの仁獨帝堯を盛なりと甚大
なる哉舞の聖徳其照るを一て大孝を愛善く海内を化也
一かは人々其親を親と一其長を長として戸々皆樂一み

あへり恐くは是人道の至りにして疵なきもの也然れ
共辨は孝弟をつくりて大徳あらわれ佛は無常を思ふて
人欲をいぬ故に佛は王位を捨て乞人となり舜は匹夫よ
りして帝位にのほり給たり爰に其徳なるらへて見れ
は心のむかし所身の居る所正愛の別ありて事業道化皆
さかしまにふれりけらる佛は神道妙用を得て徳いたら
ざる所なるといへとも其質南方の風氣によりてなる
か故に心志やわらかにして無常にむくいを愛惜善ふ
て親疎を別たす一切の衆生を見る事慈母赤子を保んを
るが如く成ける去同其是を教へ玉ふや樂を究めて苦を
遁れんことを求めぬ欲を去りて身を安んせんことを
欲しむ實に善は善たり然れども節なく慶ふふして性の

本然にあらを此故に思はあたと成りて利は害となりた
り舜は其質純粹にして中知本より性のまゝなり故仁義
恩刑ならん心行はれて偏なく倚なく夫唯天なるがかくい
いつくは知る事あるに似たれど志からず朱程の辭
をまねをなるのみつくくと誓が拙きをたもんみれば泥
中に深く肌める砥礪の如く質ふさかりて又けかれたる
なり聖愚いと一人とはりへどわれや下達して佛の清と
表裏をなるが弱冠より古希に至りて五十年物にたほは
れ利につな加れり釋綫の中に苦しむ風情にけり志か
はあれど死既に近づきぬれば頼あかたなくふりもや
らん年老に及んで羈を脱たり嗚呼たむ一日を心なを
たる事なくて耻め悔め憂樂相半せりされども獄に死

こらみあらんには増るへよりていさ、得る所を述
てなん

老にけり貪りけれども怨みなり明日をもまたぬ我
身とたもへば

世といとふ心あけれどのかれたり老いてや葉つ柳
をわして

恥思ふ心いとなつてのありける物忘れせど老の身あ
れば

道ありぬわおにたかふ身の悪は死してものある
恥に有ける

水のみ草をくらいて老にけりつなをばなるし牧
奈の駒

かくは讀みたれど大にたずることこゑあめれ中をとり
義に従ふが如きは無欲の及ぶ所にあらず又童子問り人
の性もと天徳を具ふ此心知るふして明らかなりせば物
に宿して遠いなからんか曰無我無欲の極をいへば佛に
過きたるわな一然共無我我は仁にあらず身を捨て父を見
給はず無欲は義にあらず位を去て乞食せられたり父を
見を故に五典皆乱れぬ乞食せり故に五礼共に七いたり
凡て説く所行ふ所性と天道とにいとれり是大に遠ふに
あらずや又同ふ聖人と思して得不動して中るをいふか
如きは無我無欲にあらずんばあたはどいか人曰至誠よ
く仁義礼智の性をつくりて一つもかげたる所なり故に
心の欲ある所に従て矩を踏を上智垂聖といへば至聖也

つくさるる所ある時は違いなまき事あたはず此故に已に
かち礼にかへりて仁をせよとの給たり豈唯私なきをい
いて仁を仁とせんや童子悦へり暫くありて曰翁昔一出
る思ひを記しとめて自ら心を見つるといひけん歌亦
い祢かはくは終して我にホ一給へ日さきに愚心を説釋を
辨しはた志を速るか如きは是也外に三つ五つ讀ぬる歌も
ありけれど其様子を拙ふして心に満を言て詮を強て
請り固く辨しぬ三度に及べり誓やむことをえわして曰
夫天地の徳神徳を一つに一形を念て人にやとれり其徳
又人より出て天と地とのたをけをなせりとなりあや一
いかなすめろ社は方寸にして御長は始はかはらざりけ
る此理書讀人の知らざるはな一より我も又其面影を

思ひやりてならん

塵の身にやどる心のいかなれば地に積りて天にみ
つらん
日にうくる光ふれども夜の月天か下てる影は有け
り
天か下たほふめぐみのありといへば心にもる道
やなからん
天地にみつる光のありといへば雲はみえぬ我身
なりけり
たらちねの親にもつらくある時は我身をたもふ心
たにあし
心まつ我身にたにもつらければ人にあさけのあら

んものかは

かく讀てなん自ら不才を試たり豈人のみならんや有情
非情みな陽神陰神のうめる物かたをれくに本の字のあ
らわれべきをかに似たる事こそあめれな^すへて其^い
一は^導導きものは天に類い一昇くまものは地に類せりは
た其形をみれば人は豎て物横に竹木は節を下にせり
然れ共よく見れば大にたかふ物にはあらず人知ること
ありて物より尊一又知ること有て物よりたとる事もこ
ろある中にも草と木はたえて知ることなき故まじはり
また一む道はなけれど人にあたせず物を宝せむ其性其
形春秋をうつ一な一昔も今もかはらざりけりよりて
又思ひあはむる事のありてなん

もへ出る草の二葉に天地のあかればめ^に始を^る
しる

あめつちはあ、にも見へつたなつものまろかれた
り一申にあかれば

葉は中の中道わかれたればじめのはじめあらまほ
し^はは^に

枝あかれ^はさく^く実なる深山木も二葉につ、む形な
りけり

殺は二つ心一つをたのづからわかればあふや天地
の道

此事愚か知の及ぶ所にあらず唯近きに見て遠きをかん
がみ侍るのみはた古説にたかふ所あり知者のた、一を

願ふのみなり童子筆操て是を志るせり 又四道を身
に在なる字は却て釈氏にあつて儒生にならば儒の見る所
は唐詩漢文歴代の書あるが所は巧文麗辭の向を出る志
かも又名刺のためにならば故に其辭巧にいひ自ら勞
せりはた字既にならば至ては速に微福を求めて汚れを
得たり釈氏は志からず朝夕佛を拜して誠をつく一塵禪
觀法をして性を研きたり故に得る事有に及ては野住山
にかくれて獨其身を潔ふせり中にも玄窟僧都は法を説
むを死を弔はむ床を設けず佛を請せずはた遠國は水干清
一都のうちには事志(ヤ)といひて大和にあるなる木津
川に依り守りて居らるたり然れども三輪の軍人ありて
皆尊く尊み侍りしかばいとるさくや思はれけんい

まて跡をかきせり後三輪の商人越路にまかり侍りつれ
は僧都爰に在て又船を渡せり遠く相見て知たり然れと
も其日は昏ぬ夜すてに明なるとをなる頃商人宿りを出
て善く尋侍りつれば過し夜所をさりて行衛もあらずな
れりけり一高きかな比人世に易らる本名をなす事
を勉て飢を救へり如業尊善は常に頭陀して身を長良し淨
名居士は室方犬ありて居を安んせり玄窟僧都は室なく
頭陀せずかくれて人に志らるさりしかば何國にありて
終りやをらん跡に残る志る一たもなり中國に在ては
農門是に似て爰に在ては西行是か下たるか芥野の奥に
深くかくれて心ををまゝ侍りたり去からに諸言の業も
巧あらで出る思ひを述ぶるのみなり曰

とくくと落る岩洞の苔清水汲ほをほともなき住居

かな

かく粟のわすかにして落る粟のかきかなる思ひやうた

も侘一かり一が又花を多せ一朝にはうちあかぬ心の終

にあくさみて春の色にちやむ夏のならや有けん

詠あとして花にもいたく別ぬればちる別こゝ非心か

りけれ

かくの如きは想無所任といひ一意か又月を悲しむ夕べ

には此心より至るにあらず唯われからの神の恵あとう

ちにかへり見思ひてなん

あげ、として月やは物をほはるるかこちかほなる

我涙かな

善哉や心物にとまらぬ物を悉く且貪ふして樂めり道

に近しといふにあらむや日吾人は只人に交りてこそ已

をたよほむ道はありつれ此故に聖人は衆を愛し民を惠

みて天下と共に樂めり孔子位を得玉はむといへども其

志天下を憂にあり故に我を用る者あらば東周をせん

のたまひたり然るに西行か如きわ世中を夢と見るてふ

心より家を捨仕をかへして侘をたち獨山にかくれて木

石と居り愛敬の情をやふりて心を虚に水を飲草をく

らいて求めなき麻衣とあるいて得たりと在るが道何國

にありて是を見るや然らば玄窟も又人をさけたり仁な

しといはんか曰佛に居て佛に汚れず必ず見る所あるべ

し又同霜野に退て交をたちたり世をいとふにあらむや

曰我七十に及て骸骨を乞へり是礼あり世をいとふにあ
らざる又向り隠居して何をか樂や曰居を樂むのみ後は丘
林前は平田園に梅櫻有て苑をなす園に栗柿ありて實を
結ぶ松と萩とは枝を交へ梅梢も亦ありあいたり山の根に
出る泉あり藪を隔て、落る瀧ありさるから時に従ふな
くさみありて家人と共にたのしみ敢て向家我農園を見
るに山あり園あり田野廣ふして又子孫多し翁の居違ふ
所何れにありて道にかなふや曰春は藪を取萩は菊をか
がして見ぬ世の人を憂ふのみふり竊に思へり伯夷叔齊
の清き周をさけて山にかゝり藪を取に至ては仁ならず
るに似たり武王は万民の**父**紂王は天下の**冠**父子の考に
冠を除くは仁あらずや然るを夷齊は臣たらずして**王**を

過たりといはんか終にさりてかの西山にとり其藪を取
りてなん暴を以て暴にかふ其非を去らず神農庖丁夏禹怒禹
として没したり我いつくにか適て歸せん于嗟徂也今の
衰へたるかなといいて飢死せり紂が悪うれいなる民な
く武王の仁悦いなる國なり然るに二子天下の情に恃て
一ツの大義先立ちたりたもふに武王の征は四海民の民を安
んむるにありて其仁西周に止り夷齊の飢は一己の心を
うるに在て其仁百世賜たり蓋あらば人は王の暴やまし
夷にあらば人は臣の忠尽し道たなすからば相たため
にはからずといへど答仁あり義ありて君臣の各萬國に
存せり道を知るものにあらば諱ふよく是を去らん
賢か先君保料正之曰我は伯夷に従はんとして居所守所其道

を得たり知は命をよまへし志は奪ふべからず君子人なり
り實に志りかたきは道にしてはかられざるは心なるか
善を好み悪をにくむは天下の通情^情たり故に孟子性善な
りとの玉へり然若此頃人を見るに明らかにして已を見
るに暗し悪むべき悪を愛して是てお好むべき善を厭て
はらいの^性は^性なり是も又衆人の情たり荀子愛に見る事ありて
性悪といへるかばた才有とも頼あべからず一つ
の道に四^心の各をなして各己が知の所よしとせり
神道は六^心に起り儒佛先は異邦より来れりふして見れ
ば土地に山海の限りあり風氣よりてなるこゝろが然
れ共孔子一致^度にして百^心の鈴れつれは其^心を去て
は見るべきなきかはた義に従い申せざるに至ては衆乃

善美につきぬ道二^心 あらんや又の鈴はく天は安き心を
以て知^心れ^心なるん仰て見るべし^心たるものは天古今の
別なく華夷の間ふりて夫唯一たり其流行してやまざ
るは氣なり道なり又二^心にあらず其物を生むるより
て仁といひ其みたるよりして誠といふのみたほい
なるかな氣や道や日月星辰水火金土人類諸物是其^心体
にして上を道として形して下を器とていひて物の外に道
なく道の外に物なきことと云ふし鈴へり然るに佛は天地
の^心と見て諸物を空せり試に向はん此身此心何を種と
乙生れやすらん繫絆に曰天地設位而易行乎其中矣信哉
言哉もし天やふれなば則地は崩れなん日月をいひて四時
やみなん然らば道氣何れよりして生むべき人物何國に

在て骸をなさん時に當て人なく道なきの空何によりて
か衆妙を見ん獨上吉の聖神天地と其徳を合せ日月と其
時を合とよん是地なり質五行の粹を得て本の姿のけ
かれおるなり彼賢知の過て天に遠ふか如きは志らむ
うちに弊へる物有てまのか眼の及ぶところを悦べるの
み君子をら然り仁者は山を好み知者は水を好みはた茂
叔は蓮を愛して淵明は菊を愛せり其いと一からぶるも
未だ皆質に從ふ故にて有ける或人疑へり淵明が学の老
莊に近きは菊は時の隱逸なるものにしてさいき秋の
姿あり然るにこの方の姿にとまるは虚静を樂む情に
あらむや又其詩に地偏りて幸に車馬のかまじき
なりといひ且自ら古の民と称して門をとせり交りを絶

にいたりては狂者の風あり周子蓮を愛せられたくいには
あらむ我是を喻ていはく然らむ陶子周子愛をる所をこ
とに一彼程子兄弟気象同一からむといへと學以て已れ
を正さに至ては仁知を害する憂なり陶子が質静を好に
近一といへと然共道さ知れるか家貧しく親老いたるも
以ての故に志はらく川の祭酒となりたり祭酒は爰にい
はゆる御顔の類いあるかはたに居る事久ふして猶天
命を樂みはた常に衰世を憂て吾人の義なき事をうらみ
たり其意猛嘗祖侃に續て旧君を忘れず儒道の大意を得
るにあらむや後又欽澤の令となりたりお、に所謂代官
なるか王も一奉て用る事あらは必力を中宗にいたさん
人志らざるか世にあわさるか金のいや一才腰を屈むる

耻あつて居るに忍びず此故に田園ますに流人といひ
てまた農に降り山下の瘠土を穿て豆を植徑路のちかや
とぬいて葉を存せり清哉淵明豆粥腹にみちて求なく菊
花性を慰して顔をとす居は疎も容る、安人―やまきま
あはれりはた東皐に登りて天を窺い西時に望て慮を起し
美景によりて去留―氣概に従て屈伸せり無心にして
の出る飛に倦て鳥の帰る斯る天運のやまさるを見るか
仇竟にかない情に感ざる物あは則詩賦にとなへて隠
を事なり嗚呼見高―心清―一世の端士たり此故に朱子
總目に吾の微士陶潛卒と記す小たり此人吾にありて官
に居らず劉裕世を奪ふに至ては樞臣をくる所の梁肉を
地に捨て口に入を粟をさけ逆を悪むて宋人にあらず

の意顯然たり豈虚無に偏なる弊あらんや論者宜なりと
いいたりされは韜のいや―ま比―ていはんは憚あり然
れども少―形は似て帛と狗との類いをなせり我既に書
と讀―より年を経る事五つの六つにして一日の仁なく
一事の義なき何をか得たるや僅に耻をはらぬる志有の
み故に會津に往へて三世直言して綏倭せむ左は有り―
かと筑肥の二君先君の志を―いて学あり慈あり練事を
おほまむはた老を告て退くに及ては世に頼なく身に求
めなふ―て穴躬虚に安むせりとかくに林は又古の愚に
して神代の細民なるか志る事なふ―て欲詩のみ善まか
な天道の仁萬物をの―一善を得て用をなせり故に在て
はなれる性暗夜に盜を知てま―く吠主を見ては走て

順い尾を振て悦へり警か愚物物に類しむといへと又不才
適ふ樂の有て出る思ひを口をさみたり

人毎に願ふ事しかないなは下に民たるわさは絶絶

なん
なへて皆生ル一人の千代をへば身ははだかにて草
やはみなん

斯に心の明らかなりせは天命をうるにわかーといふべ
きか

春くれば時があらやものとかにてあまつ光の恵を
を見る

野邊ちかく家居しぬれば時時の女がまつ紅葉摘雪の
村消

古き歌にしきこが本の夕暮いみ男はて、ら妻はふたも
のと讀たればいやし身にも思ひ出はあり志らさるの
み

たからなき身こそやすけれ柴の戸は風にまかせて
とつる戸もな一

志らるべき道しなけれは秋宿に花は咲ともとふ人
をなき

黄鶴黄鶴木とろかを庭に聲なふして僕もまた勞せむ

水清しつちは空を塗により打たく柴も山に志けい
れ

食しけれと飢をふへむ甚ぬれと子あり孫あり芦
のやの内

